

他力宗より見たる菩薩道觀

石 田 充 之

菩薩道ということを如何に意義づけるのか、嚴密な意味では、理論的にも思想的にも可なり精密な究明が必要である。しかし、ここでは、釋尊佛教の根本理念であつて、大・小乘の兩佛教を通して流れつつも、主として大乘佛教へとその展開をみた、空とか、緣起とか、自利即利他とか、上求菩提下化衆生とかいつたような言葉で表現されてくるような理念を六波羅蜜行といつたような實踐で體現してゆこうとする如き實踐道を意味するものと暫く規定しておきたい。

しかるに、このような菩薩道の實踐に當つて、菩薩道の實踐の徹底化の意味で、自力修行的な菩薩道の實踐を透過して出てきたものと考えられるものに、いわゆる他力宗的な淨土門的な菩薩道の實踐とでも見做されるものがみられてくるのである。それは、つとに龍樹の作と傳える『十住論』『易行品』や天(世)親の作とされる『淨土論』などの中にも、その萌芽は窺知されうるところであるが、特に具體的には曇鸞の『往生論註』の如きに明かに看取される所である。『論註』で

他力宗より見たる菩薩道觀(石 田)

は周知のように、「易行品」や『淨土論』の見解により、更に『無量壽經』の法藏菩薩道觀の所説などに顧みて、禮拜・讚嘆・作願・觀察(自利)・廻向(利他)の自利利他の衆生の五念門行の一心願生の實踐が、法藏菩薩の第十八願(念佛往生即ち一心五念願生を誓う)第十一願(正定聚に入り滅度に至るを誓う)(以上自利)・第二十二願(一生補處還廻向攝化を誓う)(以上利他)の自利利他に亘る誓願の成就される阿彌陀佛の本願力佛力の増上緣力によるが故に、佛果を得ることの速かなることを力説するのである。即ち、その思想は『十住論』の『易行品』・『淨土論』・『論註』と一貫して流れている所であるが、緣起因緣生なる大乘佛教的な最高理念の實踐的な具體的な體現には、必然的にいわゆる大乘菩薩道的な自利即利他なる實踐の完成が要求されてくるにも拘らず、實踐者それ自身の存在は自利即利他の菩薩道の實踐に精進すればするほど餘りにも不完全であり自我欲中心的存在である、といつたことに氣付かされる場合、緣起的な眞理それ自體の具體的な躍動態として因

願果力成就してその自利に即する利他なる利他の他力性を強調される阿彌陀如來の因果に亘つてのたえざる活動力を根源的な支えとしてこそ、始めて衆生の自利利他に亘る五念門行の一心願生の實踐が實効力を發揮せしめられ得ることを主張したのが『論註』の主張である。一心願生の自利利他に亘る五念門行の實踐は云うまでもなく『淨土論』に既に説く所で、衆生の佛果をめざしての大乗菩薩道的な實踐であることは云うまでもない。しかるに、かような衆生の大乗菩薩道的な實踐的實現には、法藏菩薩道的な實踐をもつて結果されてきた阿彌陀佛の如き利他の面即ち他力的躍動攝化に重點をおく先覺者の支えが是非必要であることを、實踐的に打出したのが、かような思想をつとに示した「易行品」や「淨土論」などを承けての『論註』の主張である。したがつて、そこには、一心願生自利利他の五念門行の實踐という衆生の菩薩道的な實踐に更に法藏菩薩道を内容とする阿彌陀如來の本願力を支えとするといつた、いわゆる生佛に亘つての菩薩道の實踐を認容してくるような單なる自力修行的菩薩道の實踐的場を透過して實行される特殊な菩薩道實踐の場の形成過程に注目せしめられるのである。

かような『往生論註』的な菩薩道實踐の場を經過して、それを徹底化して出てくるものに、法然の上に見出されてくるような、いわゆる他力宗としての特種な菩薩道觀が打出され

てくることを注目せしめられるのである。³法然の場合、その主張は、主著『選擇集』の「本願章」や『大經釋』などに依れば、窺いうるが、そこでは、一般佛教的に許容されてきた布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧等のいわゆる大乘菩薩道の實踐行としての六波羅蜜行はすべて自力の諸行として一括して廢捨され、法藏の選擇攝取し第十八願に誓われた稱名念佛の一行のみが大乘的佛果を得るの行業として許容されてくるのである。しかも、そこで注意せしめられることは、稱名念佛の實踐が往生成佛の實踐價值を與えられるために、法藏菩薩の衆生に代つての代受苦的な六波羅蜜行の實踐を裏付けされていることを力説されることである。法藏菩薩の六度の行の實踐によつて第十八願の誓いが成就されて、はじめで、稱名念佛の一行が往生成佛の實効力をもたしめられるわけである。従つて、そこでは、衆生の稱名念佛の實踐が成佛の實現力をもつことは法藏菩薩の菩薩道の實踐力が念佛の内容價值たらしめられて始めて許されうるわけで、法藏菩薩の菩薩道の實踐力を内容とする意味で、稱名念佛行は佛果を實現すべき大乘菩薩行としての價值を認容されてくることになるわけである。かような意味で、法藏菩薩の誓願とそれを成就するための法藏菩薩の大乘菩薩道の六度の行の修行とによつて成就された阿彌陀佛の本願力他力に絶対隨順して修習される稱名念佛は、一聲一聲が本願力躍動の顯現態ともいふべ

く、大乘的佛果實現の無上の價值をもつ大乘菩薩道の實踐ともいえるのである。かような法然による菩薩道觀は、もし一般佛教的なそれを自力向上門的な菩薩道觀と名づけるとすれば、他力向下門的な菩薩道觀とでも名づけられるべきものであろう。そこでは、いずれにしても、いわゆる菩薩道觀としては、阿彌陀佛の因位たる法藏の本願成就のための菩薩道の實踐といったことが主要な位置づけを與えられ、稱名念佛の內面的充塞價値たらしめられているということを看過してはならぬであらう。而して、なお終始に亘つて看過されてならぬことは、かような法然的な菩薩道觀は、飽くまでも、上より述べてきたように、自力向上門的な菩薩道の實踐の徹底化といった場を透過して、實踐的に結果されてきた他力向下門的な菩薩道實踐觀の確立といった性格のものであることである。

他力宗より見たる菩薩道觀としては、かような法然的な他力向下門的な菩薩道觀を基底として展開されてくるものに、更に、親鸞に出發する淨土眞宗的な菩薩道觀や、證空に出發する淨土宗西山派的な菩薩道觀、或は、辨長に出發する淨土宗鎮西派的な菩薩道觀の如きものがあることに注意させられるのである。しかるに、かような他力向下門的な菩薩道觀は、上來再三言及することであるが、自力向上門的な菩薩道觀を透過し徹底化して實踐的に打出されてきたものと考えられ

る。大體に菩薩道觀は宗教的實踐倫理觀だといつても宜しいであろうが、佛教的根本理念としての緣起空觀的な理念より必然的に出てくる實踐道である。それは、空間的にも時間的にも、自分があれば他人があつて他人に關係して存在する自分であることを必ず考ふる宗教實踐的な根本理念に立つものともいえるであらう。しかし、その場合、かような根本理念の自力による實踐的な實現に精進するに當つて、緣起的な根本理念、即ち自他相關關係的な實踐的な生き方、が如何に現實的には困難であるか、自他相關關係という相關は如何に深い斷絶的なみぞをもつかの自覺に立たされた場合、そこに導き出されてくるものが、自力向上門的な菩薩道觀を透過して出されてくる、上に言及したような他力向下門的な、いわゆるより宗教的な場を積極的に打出すものともいえる、緣起的な眞理それ自體の躍動態たる阿彌陀佛の本願力絕對隨順の他力稱名念佛一行專修の實踐に精進するという念佛菩薩道の實踐の場である。従つて、自他相關關係の緣起的な根本理念構造の把握において、實踐的には自力向上門的な菩薩道觀に立つ場合と他力向下門的な菩薩道觀に立つ場合とは可なり相違が生じていることが考えられる。抽象的に客觀化された緣起的理念の構造内容は、いずれの菩薩道觀に於ても共通的なものが考えられうるであらうが、實踐的に具體的に把握される場合、そこに、可なり差異があらしめられると考えられる。

かような觀點に立つ場合、自力向上門的な菩薩道觀は、自他相關係上の溝をそれ程深刻に考えず、自と他との差異は暫くの淺い相違であるといった觀點に立つものであるとも思惟されるが、どうであろうか。然るが故に、自他相依緣起の根本理念は自力の菩薩道的修行により容易に實現出來るとする實踐の立場をとつてゆくわけであろう。その點他力向上門的な菩薩道觀は自他の相關係上の溝を上にも言及したように極めて深く考えるもので自他の緣起的融和は容易に實現しないものとの理念を強く把持するものともいえよう。かような意味で、自力向上門的菩薩道觀は、その根本理念に於いて自他同一性的緣起觀的な立場を主軸とするものであり、法然やその門下の主張にみられる他力向下門的菩薩道觀は、自他相反性的緣起觀的な立場を主軸とするものであるといつてよいかとも考えられる。而して、法然門下に於いて、鎮西派のように、自力向上門的菩薩道の實踐たる諸行を念佛一行專修に當つて少しでも許容してゆこうと考えるものは相反性的同一性的緣起觀の理念に立つものであり、西山のように、自力向上門的菩薩道の實踐たる諸行を念佛一行へ開會してゆき、念佛一行專修へ同質化さしてゆくものは相反性的同一體的緣起觀の理念に立つものであり、眞宗の如く、自力向上門的菩薩道の實踐たる諸行を徹底的に廢捨して、かような實踐的場を超えて他力向下門的な菩薩道としての念佛一行專修に徹し

いわゆる他力念佛菩薩道觀とも見做されるものを強く打出すものは相反性的緣起觀の立場に立つものだと見做してもよいかと考えられるが、その邊どうであろうか。そこにはヒューマンリレーションの問題を如何に考えていつたらよろしいかの課題についての一の示唆が與えられてくる。眞宗的な相反性緣起觀の場では人間相互を徹底的に相互破壞的存在と考へ、それを徹底的に融合せしめてゆくような場合を體驗させられるわけであるが、そこには、大乘佛教的な緣起的理念を最も具體的に人間相互關係解決の理念として打出してくるものがあるとは考えられ得ないであろうか。それは佛教的根本理念のもつ科學的合理主義に對する背理性即ち宗教性を最も強く出してくるものとも思惟されうるのであるが、如何であろうか。（昭和卅七年度文部省科學研究費による研究）

1 西義雄氏論文「菩薩道の理念とその實踐」（印度學佛教教學研究十卷一號—昭和三十七年一月刊）等参照。

2 拙論「法然上人の阿彌陀佛觀」（淨土學二十八集—昭和三十六年十月刊）参照。